伊方訴訟ニュース

第16号
1974年12月5日

伊方行政訴訟を支援する会

伊方2号機足ぶみ
電調審年内開催のメド立たず

11月13日付の毎日新聞が，政府筋から得た情報として伝えるところによると，10～11月に予定されていた，本年度第2回目の電源開発調整審議会は，来年に持ち越される公算が大きくなったという。第2回の電調審では，伊方2号機（56万キロワット）と東京電力の福島第2原発2号機（110万キロワット）とが，候補にのぼっていた。

さる7月に開かれた第1回電調審では，柏崎1号機と玄海2号機とを，2年ぶりに，地元住民の反対を押し切って，強引に承認してしまった。しかし，会場の経済企画庁につめかけた新潟などの住民を，機動隊で追っ払い，密室で審議するという，かつてなかった無茶なやり方に対する批判も強まっていた。しかも，柏崎ではその後，住民の調査によって，東電が地盤についてのデーターを，デッチあげて提出していたことも判明したのである。さらに，「むつ」で，住民の原発不信は決定的となり，政府部内の動揺も大きいという。

政府筋によると，はっきりと電調審早期開催を呼びかけているのは，通産省だけで，環境庁，農林省，建設省などの関係省庁，それに，7月の不手際にこりている，まとめ役の経企庁は，乗り気でないという。臨時国会の日程などもあり，結局，来年2月に，第2，3回を合わせて審議することになろうと，気のない見通しを立てているとのこと。

鹿児島県川内市では，さる9月に，原発反対の住民によって送出された新市長が，これまでの，「市民の意見を聞いて慎重に」から「絶対反対」へと前進し，6月の市会誘致決議も実質的に無効となっている。したがって，当初，第2回電調審にかけると予定されていた，川内1号機（89万キロワット）も，見送られることは確定的である。四電と行政は伊方1号機がわが国はじめての許可取消行政訴訟で争われているのに，同型の2号機を強引に電調審に送りこもうとしている。有利な情況を生かして，その暴挙を阻止しよう。

行政訴訟第5回公判

—12月12日午后2時 松山地裁—

「被告（国）は，（「むつ」や美浜の）各事故により誤りであることが実証された答弁を直ちに訂正し，不当な抗争を止めよ」との原告の要求に，被告は困惑している模様。

さらなる追及を!!

もう原発はこりごりだ

――――福井県知事，県議会で答弁――――

福井県九月定例県会５日目の９月２４日，目下，動力炉核燃料開発事業団が敦賀市白木地区に建設しようとやっきになっている，高速増殖炉計画に関して，ある自民党議員が，「建設調査ぐらい認めてもよいではないか」と質問しました。これに対して中川知事は，「許可する考えはない」と以下のように答弁しました。原発誘致派知事として，政府を信じ，見返りを期待してきた中川氏の，苦悩にみちた答弁は，各地の行政担当者への，他山の石となることでしょう。

「動燃事業団による高速増殖炉の建設計画について，いろいろお尋ねになりまして，事前の調査ぐらいはさせたらどうかというような意味のお尋ねであったかと存じますが，私は，議会の本会議場におきまして，今日までたびたび，この問題についてお答えを申しあげておりますように，もし今，わが県に対して，ご相談がございましたらお断りを申しあげますという考え方であります。それは，安全性につきましては，世界的に実証されておるとはいえ，今ある関西電力美浜１号炉，あの欠陥炉問題だけでも，県民の不信感あるいは不安感は，私はぬぐいさることができないものがあると，自ら責任を感じておるのです。

そういう時でございますだけに何よりもまず，この問題をみんなが検討をし，又議会のみなさんも十分ご研究を賜わりまして，そういう方向が明らかになって，しかもですね，今日のあの県民感情としていくつも問題が残っております。たとえば，６１９万ＫＷというこの量で，今エネルギー問題が盛んになりまして原子力発電が盛んになりそうになってきております。しかし，福井県の発電量をもっている県はどこにもないのであります。わが県はその点においてはですね，パイオニア的役割を今日まで果して参ったことは事実であります。しかし，その果してまいったわが県がですね，それを取入れたばかりに，取入れない県に比べますと，いらない苦労や，いらない心配をさされておるのであります。それを管理される国は，遠い所でながめになり，全責任を負っておられますけれども，しかし，その苦労があるということは，いなめない事実であります。（中略）

また，たとえば，わが県が申しあげましたような発電税等につきましても，もう全然方向が変わってまいります。促進税に変わってまいります。私をして，極端に言わしめますとですね，これは企業代弁税だという。原子力発電県がですね，永久に，この原子力発電所が立地したためによくぞ栄えた，みんなも幸せになったという方向を，やっぱりこの際求めてゆくためにですね，ここでじっくり構えて，十分審議をして，そして方向を決定して参らねばと考えておる次第でございます。

そういうことでございますので，むしろそれは，事前の調査でございましても，通常の県民感情と致しまして，準備行為が先行致しますと，あれは決定したのではないかというような考えもでてまいります。むしろ，混乱を招くおそれがあるという考え方に立って，十分これから問題を論議してゆかねばならんという風に思っておる次第でございます。」

「'76年までに原発をすべて止めよう!!」

熱気に満ちたワシントン大集会

前号のニュースでおしらせしましたように，11月15日から3日間，ワシントンで，ラルフ・ネーダ主催の，原発反対市民集会が開かれました。伊方訴訟グループを代表して参加された市川定夫氏から，16日付で，つぎの手紙が事務局に送られてきました。

「ワシントンに予定通り着き，このホテルに入ったのが14日夕方6時すぎ。この首都にある数多いホテルのうち，空港からのリムジーンバスが停まるのは，このホテルとあと一つというだけあって，800室のデッカイホテル。料金がシングル最低29ドルというのも，うなずけるような気がしたし，米国の市民運動の豪華さには驚きを新たにしたり。ところが，クリテイカル・マス'74（集会の名称）の標識はどこにもなく，初めはホテルを間違えたのかとも思いました。早速，ネーダーの事務所と，この集会の事務局に電話を入れましたが，5時すぎのためか返答なし。

15日朝8時半ごろより急に人が集まり出し，受付が始められ，プログラムを受けとりました。ところが，私がやるはずの分科会はなくなっており，びっくりしました。とにかく，朝9時からの市民公聴会に顔を出しました。参加者は9時ですでに約500名位，12時前には1000名を越えているように見えました。この公聴会は，ネーダーが司会となって，1名の上院議員，5名の下院議員を相手に，専門家が先ず議論し，一般参加者も討論に加わるというもので，運動の中心になっている人たちもいて，仲々活潑でした。

まず，専門家，運動家より，「原発の危険性」，「事故」，「プルトニウム」，「AEC（原子力委員会）の秘密性」，「だまし討ちの建設」など，聞いたことのあることが，くり返し並べたてられました。専門家の中で，ゴフマンと元AEC委員のホセバー（米国AECの安全性評価がデタラメであると，最近会社をやめて反対運動に参加した，コンピューターコードの専門家。事務局注），ノーベル賞のアルフベンが，特に目を惹きました。市民運動家の一人，ジョーンズ女史は激しい口調で語り，アレン女史も，バージニア州の例について，「AECが情報を隠して安全を説いたことを鋭く追及し，『我々の依託を受けた議員達が，人々をだますAEC委員を1人でも在任しておくなら，あなた達も同罪だ。もし，明確に原子力開発に反対しないなら，あなた達を二度と議員にさせないし，そうする力は我々に200%ある』とせまり，ついに議員を反対派にさせた」と報告すると，総員立ち上っての拍手。この辺に，日本と米国のデモクラシーの有無の差が明白にあるように思いました。

議員達は，このようなフンイキの中でも，「エネルギーの不足をどうするか」，「ラスムッセン報告をどう評価するのか」，「原子炉には改良の余地はないのか」，「すぐ止めなければならぬ危険性はないではないか」等と質問。専門家達が明確に答えていく。「エネルギー危機は余裕を見込みすぎたからだ。エネルギーがあるからと，どんどん消費させてきたから消費が増えた。少し倹約を呼びかけたら，原子炉が半分止っていても，十分エ

ネルギーは余っているではないか」，「少くとも安全性が証明されるまで止めても，エネルギー危機は作らなければ来ない」，「ラスムッセン報告は，実験データーを無視しているから，全然問題にならない」，「事故が起こってから炉をとめても遅くないというのか」等々。特に，ホセバーが，「ＡＥＣの計画はあまりにも早く進められ，科学的評価が間に合わなかった。従って近年は，ＡＥＣがやってきたことを正当化し，また，それを証明しようとすることだけに追われている。そのため，ＡＥＣは，人々の望まない方向にしか動けず，事実を隠したり，ウソや不充分なことしか言えないハメに陥っている」，また，「委員の多くは，それまでの係り合いに責任を負れ切れず，また，研究費の停止，委員辞任後の職の無さが頭にあって，本当のことが言えなくなっている」とまでバクロしました。

午后は，賛成派の２名がＡＥＣ側の発言をまず行ない，それに対し，一般参加者が論を斗わすという形式で，元ＡＥＣ委員（まだ賛成派で，民間会社にいる）は，マナイタの上で，かわいそうでした。しまいに，「プルトニウムが６００年残っても，人類の歴史から見て長いものではない」，「ＡＥＣの方が豊富に情報を持っているのだから，タンプリンやゴフマンより信頼できる」，「過去にＡＥＣが秘密を持っていたことは認めるが，今は皆知っているじやないか」，「今止めろと言われると，今までの積上げが皆ムダになる」等，開き直りしかなくなり，最後にネーダーが，「プルトニウムの輸送中やサボタージュで事故が起こったらどうする」と聞くと，「輸送とゲリラは，警備と国際協定で防ぐ。サボタージュは労働者教育で防げる」といったので大笑いになりました。ヤジが面白かった。「ゲリラはＡＥＣに事前に攻撃を知らせるのか？」，「ナチス方式取入れをＡＥＣはいつきめるのか？」など。

この後，事務局の人やネーダーと相談し，翌１６日に私が話をする機会を作って貰いました。１６日朝，他の４名の専門家と共に，１０００人位の参加者の前で約２０分話をし，司会のネーダーから段上でネギらわれ，参加者多数が立ち上って拍手を何分も続けてくれ，二度も段上に呼び戻されました。このあとが質問ぜめで，日本での事故例やムラサキツユクサ（低線量の放射線で突然変異を起こす草花で，市川氏の専門。先日，浜岡原発から約１Ｋｍの地点で変化が認められ話題となっている。事務局注）のことを，教え切れない人達（老若女男の差なく）に取り囲まれて，特に，報道関係にもきかれ，この時は非常に緊張しました。ただし，段上での話は，スライドが使えなかったこと，話題が少し全体的にはずれていたため，運動の方式にはあまり触れることができず，あとで，個人的に話し合いました，夕方５時，ネーダーら中心人物が記者会見に出ている間，部屋に戻ったら，ついウトウトと１時間眠ってしまう位疲れました。学会とは大違いです。

夕方６時より，しめくくりの集会があり，その最後にネーダーが立ち，「１９７６年までに，新しい原発の建設と運転中の原発をすべて止めよう。たった一回，はじめてのこの種の市民運動の集まり，シロウトの集まりが，技術の一分野を相手に斗い，７６年までに勝つ見通しはついた」と宣言し，１０分以上の拍手で，しめくくりになりました。（夜９時）

署名運動など，ＳＴＯＰ　The NUC—

LEAR POWER（原子力阻止）の地道な運動は，すさまじく，このスローガンをプリントした丸首シャツが大売れです。すでに，何名もの議員が「投降」し，あるいは，敗れて（中間選挙で），新しい「原発反対派」に置き換えられたとのこと。さらに，2月までに，この10名を狙い打つという目標議員もきまり，彼らは，きわめて自信タップリといったところです。午后の小集会では，新聞界の代表者達が徹底的にたたかれ，不買運動（配達刊でないのでやりやすい。スタンドの前で，買わない呼びかけをすると売れ行きは半減するという）のおどしを受けていました。直接民主主義の手本みたいなものです。

夕食後，10時から，ルイジアナ州から，たった一人しか来ていないという，ものすごい美人のお嬢さん（と思っていたら，話している内に1940年産まれのミセスと判明）につかまり，ついさっきまでロビーで二人だけで話していました。まだ原発の「ゲ」の字も来ていないルイジアナでの関心，彼らの，広島・長崎への関心に驚きました。彼女の父親は，日本で捕虜になっているとき，広島で原爆を受け死んだとのこと。彼女にとって，話をした日本人は私が始めてだそうで，「今まで日本人をうらんでいたが，あなたの広島の話を聞いたので，私も日本人を許すから，日本人も米国人を許して，原発を無くすように協力してほしい」といわれ，どっちがどっちかと，変な気になりました。

このほか，若い学生達は，日本の全共斗の学生達とそっくりです。5人位の女の子と，同数の男の子が，しょっちゅうつきまとって，何でも聞きます。そのうちの一人はインディアナ州の19才の女の子で，金沢の北陸学院に交換留学生で1年いたとのことで，美浜のことを知っていました。

明朝，まだ分科会がいくつかあります。この二日間，たった一回しかホテルの外に出ていません。（17日2時50分）市川」

「東京電力を追い出そう〃」

柏崎で住民・労働者大集会

11月24日，柏崎・刈羽原発反対守る会連合，柏崎原発反対同盟，日本社会党県本部，新潟県労働組合評議会の四者共催の集会が，原発予定地で開かれた。海から吹きつける激しい風雨にもかゝわらず，予想を越える4千5百名が参集する大集会となり，現地住民と支援労働者の決意を示す，大デモンストレーションが，くりひろげられた。以下は，集会で採決された決議文である。

「原子力発電所の危険性は，数多くの事故や放射能漏れ，さらに軽水炉型原発の根元をゆるがす一次冷却水パイプの欠陥問題で明らかとなった。また，原子力船〃むつ〃は，原子力行政のデタラメさ，無責任さと，安全審査体制の無能さを全国民の前に，はっきりと示した。

柏崎，刈羽では，我々の強固な原発阻止のたたかいの中で，一号炉建設計画の地点付近に大断層が走り，地質がきわめて軟弱であることが確められた。しかも，東京電力はこの劣悪地盤をごまかすために数値書き換えを行なって，電源開発調整審議会の認可をとりつけたことも判明した。

我々は，生活といのちをかけた住民の原発阻止のたたかいと，労働者のたたかいが，道理に合ったものであること，そして，両者の

固い結束が，このたたかいを勝利に導くことを確信する。

我々は原発建設を断固として許さず，実力をもって阻止する決意をこめて次のことを決議する。

1. 東京電力の原子力発電所建設を実力で阻止する。

2. 東京電力の書き換え数値に基づいてなされた電調審認可の白紙撤回を勝ちとる。

3. 原子炉安全専門審査会申請を阻止する。

4. 先祖伝来の荒浜村有地，里道を実力で守りぬく。

(1) 荒浜村有地及び里道にかかわる入会慣行権を行使し，活用していく。

(2) 荒浜村有地の市議会での売却の審議を実力で阻止する。

(3) 里道の用途廃止を実力で阻止する。

5. 東京電力の準備工事など，用地内の作業を実力で阻止するたたかいをやりぬく。

6. 原発関連工事を全県的なたたかいで阻止してゆく。

(1) 信濃川からの一次冷却水取水を阻止する。

(2) 送電線の建設を阻止する。

7. まやかし公聴会の開催を阻止する。」

―放射線被災者同盟発足―

日本原電敦賀発電所で作業中に被ばくした岩佐さんと，高校時代のアルバイト中，イリジウムの線源で被ばくしたAさんとが中心になって，産業医療，研究などの各施設で放射線障害を受けた人たちの，相互援助組織として，11月8日に発足。お二人の手記をまとめたパンフレット「苦しみと不安を乗り越えて」（カンパ100円）を発行。ご希望の方やお問合せは事務局まで。

年末カンパの訴え

とめどもないインフレは，容赦なく，われわれの運動にも襲いかかってきています。大阪―松山間の航空賃も35％アップになりました。しかし，公判に送る弁護団は減らしたくありません。土地裁判にも，わずかでも支援を続けたいと思います。また，国内外の，原発反対運動との交流も，ますます盛んになり，その中での「支援の会」の役割も，さらに重くなりそうです。

この一年，新しく入られた方も含め会員の皆さんに支えられて，5回の公判も斗いぬくことができました。諸事物入りの折から，心苦しい限りですが，インフレ防衛のためのカンパにご協力下さいますように。　事務局

会計報告（'74. 11/9～11/30）

収入	
会　費	50,250
カンパ（市川氏渡米）	10,000
前月より繰越	195,912
	256,162
支出	
ニュース代	8,000
為替手数料	525
郵送料	4,855
会場費	6,600
資料費	4,780
市川氏渡米カンパ	60,000
第5回公判航空運賃	144,720
	229,480
繰越金	26,682